

介護職員勤務環境改善支援事業

事例報告

1. 施設紹介	法人名	社会福祉法人 宮城福祉会
	施設名	特別養護老人ホーム 芍薬の里色麻
	開設	平成25年5月17日
	利用定員	長期100名 短期10名
	(内訳)	1階 多床室(2人部屋) 50名
		2階 ユニット型個室50名
		ショートステイ10名(ユニット型個室)
	職員数	1階 介護職員 22名
		2階 介護職員 24名

2. リフト導入の経緯

車椅子やベッドへの移乗や、入浴介助等の際に2人介助が必要な利用者が1階5名、2階5名と増加してきた。それに伴い腰痛や介護の負担を感じる職員が増えてきた。また、介助時の態勢不良によりぎっくり腰を発症して休む職員も出てきたため、抱えない介護を検討するためリフト導入について施設長から提案があった。

3. 現状の把握

体重の重い利用者や身体の高い利用者など二人介助(移乗など)の必要な利用者に対して、介助する職員の意見と介助される利用者の双方の意見を聞き取りした。

職員からは、「移乗の際、二人でやってもタイミングにより腰に負担がかかる」ことや「移乗に使用しているバスタオル等が破けそうで怖い」「毎回なのでバスタオルがすぐ使えなくなる(破ける)」など。利用者からは、「勢いをつけて移乗されるので怖い」「職員が大変そうなので申し訳ない」「起こしてもらうのを遠慮してしまう」などの意見があった。

また、リフトを導入するに当たって職員から「面倒くさい」「使わなきゃいけないのか？」

「時間がかかるので使いたくない」など厳しい言葉が多かった。

利用者からも「機械でされるのは怖い」「落ちたりしないの？」など不安な言葉が聞かれた。

4. 対象者の選定及び介護リフト、リフト吊り具の選定

対象となる利用者は、介助の負担が大きい方を1階、2階5名ずつ選んで、体重が重くても辛うじて立位ができる方（リフト使用でADLの低下につながる方）や意思表示のできない方（リフト使用時の確認ができない）は対象から外し、本人の同意と家族の同意を得られた方を選んだ。リフトについては、取り扱いやすい据置型リフト マキシスカイ 440 を2台と床走行式リフト つるべー1台を導入した。

吊り具（スリングシート）は、職員の「面倒くさい」等の意識を変えるため、脚分離式ではなく、着脱の手間を無くしたパオ（ふかふかな敷物様）のフルサイズ1枚とハーフサイズ2枚を購入した。

5. リフト導入及び使用についての研修（勉強会）

当施設では、業務の関係で決まった時間に定期的に勉強会を開くことが困難だったため、メーカー担当者とリフト指導専門職（同じ法人内のPT）よりリフトを担当する機能訓練指導員がリフトの取扱い等の指導を受けて、リフトを取り扱う職員に個別に1か月間指導していく方法を取りました。また、リフトを操作する際も指導を受けた職員が1か月間は二人で取り扱うことにしました。

6. リフトを導入してみたの効果と反省（問題点）

リフトを使用した利用者からは、移乗の際の怖さもなく、「職員の負担も少ないようなので気軽に離床をお願いできた。」と好評価であった。

また、職員からは、腰の負担が減ったし思ったより取り扱いもしやすかったと据置型リフトと敷き型スリングシートについては好評価であった。しかし、床走行型リフトについては、担当の機能訓練指導員と一緒にないと不安だという職員がまだ多かった。

7. 今後の課題

スリングシートを敷きっぱなしで使えるパオ（ふかふかな物）にしたため、排せつで汚染される心配や夏場の暑い時期にはすぐわないところをどう対処していくかが問題となった。

状況により、脚分離のスリングシートやメッシュタイプの使用など用途に合わせたスリングシートと洗濯等のため予備のスリングシートの購入を検討する必要がある。

また、一番の問題は据置型リフト等、現在補助金でレンタルしているものの導入をどう図るか？ 据置型リフトは1台100万を超える値段であり、床走行型でも30万を超える値段、現在のレンタルしてるリフトと用途に合わせたスリングシートや予備の追加購入をすると約270万の経費が掛かる見込みでその予算の捻出が課題である。